

● CNCP はあなたが参加し楽しく議論し活動する場です ●

シリーズ「土木ということば」

第 4 回随筆、軍記物の「土木」

鎌倉時代初期の随筆『方丈記（鴨長明）』（1212 年成立）に現代にまで伝わる「土木」の一節「いまうつり住（すむ）人は土木（とぼく）の煩（わづらひ）あることを嘆（なげ）く」がある。江戸時代には木版で印刷された版本が多くあり、よみ仮名（括弧書きで示した）が付くので、ここでも「土木」のよみが「とぼく」とわかる。現代語訳は「新たに移住してきた人は、建築のやっかひを嘆いている。」〔築瀬一雄訳注：方丈記、角川学芸出版、2010 年〕である。

この一節は琵琶法師によって語られる『平家物語』に「いま移る人々は、土木（とぼく）のわづらひをなげきあへり」〔梶原正明・山下宏明校注：平家物語（二）、岩波書店、1999 年〕と引用されており、これも「とぼく」とよむ。

平家物語には語られる平曲譜本のほか、読み物としても内容の異なる諸本があり、複数の版本が残る『源平盛衰記』での該当部分は「今うつりいたる人は、土木の煩らひ旅宿をかなしみてなげく。」である。よみ仮名は宝永四年（1707 年）版で「どぼく」、寛政八年（1796 年）版で「どもく」と一定しない。

これまで、治承四年（1180 年）福原遷都のこの「土木のわづらひ」は、家作の材料またはつくることの支障とするのが通説である。ただ、これら諸本の前後の記述から、この「土木」は、ほぼ半年の短い仮住まいで平安京への帰還となってしまった福原京の様々な生活基盤（区画、道路、住居など）の不備を嘆いているとする方が自然ではないだろうか。

（土木学会土木広報センター次長 小松 淳）

Vol.52 コンテンツ

巻頭言	老いて旧山陽道を歩く	皆本 義典	2
コラム	やっぱり皆が知っておくのが良いんだよね！	駒田 智久	3
オピニオン	土木屋として西日本豪雨災害への考察	野村 吉春	5
トピックス	NPO 法人の法制度施行から 20 年を経て	有岡 正樹	7
明治 150 年企画(12)	歴史を紐解く大切さとこれからの土木	山本 卓朗	10
会員紹介	NPO 法人 社会基盤の超長寿命化を考える日本会議(LIME Japan)		11
部門活動紹介	自治体インフラメンテ研究会と インフラメンテナンス国民会議支援活動の報告について	鈴木 泉	13
シドニー視察旅行記(9)	道路と橋梁のアセットマネジメントの状況	皆川 勝	15
会員からの投稿	まちづくりの通訳・”協働”における専門家の役割	蒔田 實	17
サポーターからの投稿	東北再訪 震災後七年の海岸線をたどる	須田 光郎	18
事務局通信			19